

戦国武将伝

西日本編

目次

十五本の矢

〔広島県〕

毛利元就……………7

謀聖の贄にえ

〔島根県〕

尼子経久……………19

帰らせろ

〔山口県〕

大内義興……………35

九兵衛の再縁

〔奈良県〕

松永久秀……………47

老軀、翔ける

〔佐賀県〕

龍造寺家兼……………59

宇喜多の双弾

〔岡山県〕

宇喜多直家……………69

四杯目の茶

〔滋賀県〕

石田三成……………81

雷神の皮

〔大分県〕

戸次道雪……………95

何のための太刀

〔三重県〕

北畠具教……………107

未完なり

〔兵庫県〕

黒田官兵衛……………119

夢はあれども

〔鳥取県〕

亀井茲矩……………131

泥水も美味し

〔宮崎県〕

伊東祐兵……………145

海と空の戦士

〔長崎県〕

有馬晴信……………159

小賢しい小姓たちよ

〔熊本県〕

加藤清正……………171

孫一と螢

〔和歌山県〕 雑賀孫一……………183

旅人の家

〔京都府〕 足利義昭……………195

土を知る天下人

〔大阪府〕 豊臣秀吉……………207

三好みよしの舳

〔香川県〕 十河存保……………221

土佐の土産

〔高知県〕 長宗我部元親……………233

証を残す日々

〔愛媛県〕 加藤嘉明……………247

怪しく陽気な者たちと

〔鹿児島県〕 島津義弘……………259

三坪の浜の約束

〔沖縄県〕

謝名利山……………273

古狸と孫

〔徳島県〕

蜂須賀家政……………289

立花の家風

〔福岡県〕

立花宗茂……………305

『戦国武将伝 東日本編』 目次

黄斑 <small>おうはん</small> の文 <small>ふみ</small>	〔群馬県〕	長野業正	津軽という家	〔青森県〕	津軽為信
竹千代の値	〔東京都〕	徳川家康	半夏生 <small>はんげしゅう</small> の人	〔富山県〕	佐々成政
汁かけ飯の戦い	〔神奈川県〕	北条氏政	雅なる執権	〔福島県〕	金上盛備
青に恋して	〔千葉県〕	里見義弘	完璧なり	〔岐阜県〕	竹中半兵衛
阿呆に教えよ	〔愛知県〕	織田信長	春に向けて耐えよ	〔栃木県〕	宇都宮国綱
由利の豪傑	〔秋田県〕	矢島満安	鬼の生涯	〔茨城県〕	佐竹義重
義元の影	〔静岡県〕	今川義元	風の中のレラ	〔北海道〕	蠣崎慶広
裸の親子	〔山形県〕	最上義光	頂戴致す	〔宮城県〕	伊達政宗
武州を駆ける	〔埼玉県〕	太田資正	松齋の空鉄砲	〔岩手県〕	北信愛
暮天の正将	〔山梨県〕	武田信玄	猿千代の鼻毛	〔石川県〕	前田利常
高くとんだ	〔福井県〕	富田長繁	真田の夢	〔長野県〕	真田信幸
蒼天の代将	〔新潟県〕	上杉謙信			

広島県

毛利元就

十五本の矢

毛利元就もうりもとじは氣鬱きうつな日々を過おぎしていた。己おのれはすでに齡よわい六十一を数かえている。人生五十年などと言いうのだから、もうとつくに鬼籍きせきに入いつていてもおかしくない歳さいである。

確かに若い頃ころに比べれば、躰からだも衰おとろえ、朝夕あすはには節々せつせつが痛いたくなるようなこともしばしば。だが幸さいいにもそれ以外いに大きな病やまいもなく、まだ暫しばらくは生き永ながえそうな氣きがしている。とはいいえ、決して楽観らくかん出来る歳さいでないことには変かわわらない。

——儂わしが死しねば毛利はどうなる。

これが元就もとすけの心労こころうの最もたるものである。

そもそも毛利家もうりけは安芸あきの国人こくじんの家いへに過かぎなかつた。国人こくじんの中なかでも極きよくめて小こさな部類ぶるいに入る。元就もとすけはそのような毛利家もうりけの次男つぎなんに生うまれた。元来もとよりならば家督かとくを相あ続つする身分身分でもなかつたのである。

元就もとすけが二十歳はたちの時とき、兄あにが急死きゅうじした。その動揺どうごを見計みけいらつて近隣きんりんの国人こくじんたちが攻せめ寄よせてきつて、元就もとすけは家中いへが混乱こんらんする中なか、戦いくさに出いるはめになつた。しかもこれが初陣はつじんである。初陣はつじんが毛利家存亡きんぼうの一戦いっせんなど、悲惨ひつぱんを通とおり越こして滑稽こっけいだとすら感じていたものである。

だがこれは毛利家もうりけにとつては珍めづしいことではなかつた。長門ながとの大内家おほうち、出雲いずもの尼子家あまごという大勢力おほいぢりきに挟はさまれ、常とこに滅亡めつぼうの危機ききに晒さらされていた。その両者りやうしやの間まを懸命けんめいに泳およいでいる内に、

徐々に領地が広がり今では五か国の太守にまでなっている。

世の人は己のことを知恵者などと言うが、謙遜ではなく多分に運に助けられたと本気で考えている。もう一度、同じことをやれと言われても出来る自信など無かった。

幸運があれば不運も巡ってくる。それは毛利家とて例外ではない。そんな時こそ一族が結束してことに当たらねばならない。しかし息子や娘たちは、些細なことで諍いばかり起こしている。己の目の黒いうちはまだしも、死んでからもこのような状態だと、家はあつと言う間に吹き飛んでしまう。事実、元就はそのような家を幾つも見て来たし、時にその不和に付け込むようなこともしてきた。

今、元就には六人の息子がいる。嫡男の隆元は齢三十五。決して武将として華がある訳ではないが、温和で実直な男で跡取りには至極向いている。だが生来の生真面目さから、すぐ下の奔放な二人の弟にいつも苦言を零している。

安芸国の名門、吉川氏に養子に入れた次男の元春は当年で二十八になる。兄弟のうちでもっとも剛毅な性質で、頭も切れぬ訳ではない。だが些か感情的なところがあり、怒りだしたら手がつけられない。

小早川家に養子に入った三男の隆景は二十五歳。まだ若いが相当な切れ者で、余人は己に最も似ているなどと評している。だがそれを鼻にかけているところも散見出来、才気走って上二人の兄への侮りも感じる。

四男の元清は七歳、五男元秋は六歳、六男元俱は三歳と、まだ分別もつかぬ歳が離れた兄弟

がいる。上の三人とは親子ほど歳も離れているため、隆元、元春、隆景がしっかりとすれば問題はない。

「どうにかせねばな」

このままでは己が死んだ後の毛利家の行き先は暗い。元就は三人の子たちに向け、十四箇条に亘る教訓を書き認めた。長々と書いてはいるが要約すれば、吉川、小早川の両家は毛利本家を凌ぐとせず守り立てていけ。末代ならばいざしらず、兄弟が生きている内は必ず力を合わせよといったものである。

三人は畏まってそれを読み、己に約束を守ると誓った。しかしどの者も腹の内では承服していないのが、父である己には透けて見える。それで教訓だけを残したところで無駄だと悟った。兄弟で争うことの不利、手を取り合うことの有利を、身をもって解らせる必要がある。

元就は思案している中である妙案を思いついた。兄弟三人を呼びつけ、一本ずつ矢を折らせてみる。これは難なくやってのけるだろう。その後三本の矢を束ねたものを渡し、同じように折らせてみるのだ。三本になれば折るのは容易ではなからう。そこで三人が力を合わせることの重要さを説くのである。元就は己の計画の成功を思い描き、ふふと口元を緩めた。

二

元就には三人の娘がいる。いや、厳密に言えばいたというべきか。まだ毛利家が弱小だった

頃、長女を安芸高橋家に人質に出さねばならなかった。後に高橋家と関係がこじれ、元就は苦悩の末に打ち滅ぼした。長女は当然ながら非業の死を遂げた。

——赦してくれ……。

元就はこの長女のことを忘れたことは一日もない。殺されることを解りながら攻めたのは己なのだ。ただ言い訳をすれば、あの局面で退けば従っていた国人も相次いで離反し、毛利家は壊滅していただろう。そのようなことがあったせいで、残る二人の娘は何としても幸せになつて欲しいと願っている。

三女は大人しい性格で、上原元将の許に嫁いで上手くやっている。問題は次女の五龍である。重臣の穴戸隆家に嫁いでいるが、若い頃からのお転婆ぶりは変わっていない。兄の隆元に、

「兄上はお優しいから、元春や隆景に侮られるのです」

と、齒に衣着せず直言することもしばしば。弟の元春などとは取っ組み合いの喧嘩をすることもある。そしてそれを冷ややかに見ている隆景に対し、

「あなたも茫としていないで、止めに入りなさい！」

などと、自らが喧嘩しているのに、ぴしゃりと言い放つ始末である。竹を割ったような性格で、男に挑む勇気もある。それでいて頭も頗る良い。もし男に生まれていれば、名将になったのではないかと、元就はふと考えるのだ。

元就が「三本の矢」を仕掛けようとしている矢先、その五龍が機嫌伺に姿を見せた。そこ

で元就は計画を得意げに話したのだが、五龍は言下に、

「元春ならば三本くらい折ります」

と、言い放った。

「それは儂も考えておる。その時は元清らの分も含めて六本に増やしてだな……」

「御父上はあの馬鹿力を甘く見ておられます。きっと折るでしょう」

「そんなにか……ではそなたら娘の分も含めて八本に増やす」

「そのあたりで隆景がしゃしゃり出てくるでしょう。兄上、梃子てこを使って折るのでなると、得意げに言うのが目に浮かびます」

八本を膝ひざと畳たたみに挟んでへし折る。確かに隆景ならば考えそうなものである。

「それはまづいな。今一度考えなおすか……」

「いえ、よろしいと思います」

五龍が言ったので、元就は眉まゆを顰ひそめた。

「いまそなたは、八本でも折ると申したではないか」

「折らせましょう。ならば次は我が夫の分、妹の夫の上原の分、それでも折られれば兎玉の分、福原の分と、重臣の数まで足していけばよいかと」

「そこまですれば、儂が意地になっていと思われるではないか」

「元清を出したあたりから、とつくに意地になっていと思われるでしょう」

五龍はくすりと笑い、元就もこめかみを搔かいて苦笑した。

「確かにそうだ」

「よいのです。どんどん折らせてゆけば。幾らなんでも限界はいつかきます。その時に……」

五龍は顔を近づけてそっと耳打ちをした。

「なるほど。お主は知恵者だな」

「兄上や弟たちを側で見えて来たのですから。皆の顔を想像すると笑いが込み上げてきます」

三

元就が三人を呼びつけたのは、その三日後のことである。何の話か察しがついているのだろう。元春はすこしふてくされたような表情で、隆元がそれを窺たしなめている。

「呼び立てたのは、毛利家の今後のことだ。お主たちが力を合わせねば立ち行かぬ……ところで、この矢を折ってみよ」

元就は脇に置いた矢を一人ずつに手渡した。隆景は真っ先に後の展開が読めたようで、小さな溜息ためいきを漏らしていた。元春はすでに袖を捲まくり、隆元も困惑しつつ受け取る。それぞれすぐに矢を真っ二つに折って見せた。

「では、三本ではどうだ？」

「一本では折れる矢も、三本なら折れぬ。兄弟は力を合わせなくてはならないということだす

な」

「隆景、出過ぎぞ」

隆景が先んじて答えを言い、隆元が怒氣どきを込めて制した。

「私は無理です。が、吉川殿ならば折られるかと」

よそよそしく呼ぶ隆景は、己は知恵でもって毛利に仕えていると言わんばかりに目を細めた。

「まさか」

元就は首を横に振った。その間にまず隆元が折ろうとするが、矢はしなるのみである。

「では俺が」

元春が力を込めると、激しい音を立てて三本の矢がささくれだつように折れた。元春は得意げに胸を張り、隆元は大きく溜息を零す。もしかすると隆元も折れたが、己おもんばかに慮おもんばかって力を抜いたのかもしれない。そのように心配りの出来る長男である。

「何……では、六本ではどうだ」

「元清らも含めて……と、いう意味ですな」

また隆景が即座に言う。元春は鼻息荒く六本を束ねると、一気にへし折った。ただの力自慢になってしまっている元春、言わんことではないという隆景、心苦しそうに俯うつむく隆元という構図である。

「では、娘二人の分で八本じゃ」

これは元春とて流石さすがに折れなかったが、ここで隆景が一つの提案をした。

「吉川殿、私に」

「俺で折れぬのに、お主に折れるか」

「いえ、こうです」

隆景は矢の束を膝の下に敷き、両手で引き上げるようにして折ろうとした。矢は今にも弾けんばかりにしなるが、隆景の力が足りず折るには至らない。

「さすがにお主らでも折れぬな」

元就が小馬鹿こばかにしたように言う、隆景は顔を真っ赤にして言った。

「兄上、押して下され」

「おう」

元春が押し上げると、軋きんだ矢がばちんと爆はぜるように折れた。

「父上、いかが……」

隆景は息を切らしながら言う。

「では、宍戸と上原の分だ。これならどうだ。あれらも一族ぞ」

「望むところです。兄上、いけますな」

「当然だ」

他人が見れば親子でむきになっているとしか見えないだろう。尤も人の出来た隆元はこの場をどう収めようかと、おろおろとしている。十本になると膝で押さえるのも容易ではなく、両

手で押さえ込まねばならない。引き上げるのが元春一人になったことで、矢はなかなか折れずにいる。

「兄上も見ていないで力を貸してくれ」

「お願い致します。兄上」

元春と隆景の声が重なり、隆元は戸惑いながらも元春と手を重ねて引き上げる。十本の矢は激しい音を立てて順に折れていく。

「ええい、では兎玉、福原もだ。あれらも毛利の支柱ぞ！」

矢は十二本になるが、これも四苦八苦しなから折ってみせる。苦しい言い訳と共に、矢を増やしていき、遂に折れなかったのは十五本になったところであった。

「どうだ、折れぬだろう」

元就が静かに言うのと、隆景は肩で息を切らしながら反論した。

「お言葉ですが……少々、大人気のうございませぬか」

「そうだな。だが十二あたりが限界だと思っていたが、よくぞここまで来たものだ」

元就が微笑むと、三人ははっとしたような顔付きになる。

「三人で力を合わせれば、儂の思い描く以上の力が出るということだ」

隆元は素直に感心し、元春は苦笑して頬を掻く。隆景は謀られたといったように額をぴしりと叩いた。

「十五本が毛利家存亡の秋よ。次は折ってくれろと信じている」

元就が穏やかに言うのと、三人は気恥ずかしそうに互いに顔を見合わせた後、揃って深々と頭を下げた。

「上手くいきましましたでしょう？」

その翌日、訪ねて来た五龍の第一声はそれであった。

「ああ、お主の言う通りだ」

「三者三様ですが、一つ、まったく同じものもありますからね」

五龍いわく、それは己に対しての気持ちであるという。己は運の力も借りてここまで来たと思っているが、三人は小国人から五か国まで版図を広げた父を尊敬し、同時に超えられぬという想いも持ち合わせているという。それはいつか超えたいという気持ちと裏腹でもある。そのような心を刺激すれば、三人して父に挑戦してくると五龍は踏んでおり、まさしくその通りになった訳である。

「それにしても、儂は恰好悪いな」

元就は苦笑してしまった。むきになって矢の本数を折れぬところまで増やしたことが、少々恥ずかしくもあった。

「ご心配には及びません。そのあたりは兄上が心得ておられるかと」

隆元は家中の調整を取ることに最も長けている。元就を少しでも貶めることが、家のためにならぬことを重々承知であるという。そもそもこの話は紙に書いては残さぬであろうし、逸話

として伝わっても、今少し恰好のつくものに作り変えられるに違いないと五龍は語った。

「恐らく、三本の矢のところで止めるのでは？」

五龍はにこりと笑ってみせた。

「それだと元春あたりが、俺が非力に伝わるとふてくされるだろうな」

元就はぶつくさ言う元春を想像して、思わず噴き出してしまった。

「それも今の三人ならば、話し合つて折り合いを付けるでしょう」

「お主もいるしな」

毛利家はこれから幾つもの困難に立ち向かわねばならぬだろう。たとえ、また言い争いになつても、同じ方向を向いている限りは必ず最良の答えを出すはず。そんな時にはこの日のことを思い出してくれるに違いない。そう確信して元就は穏やかに微笑んで深く頷いた。

一 五竜ごりゅう之事、是又五もど所ところ之儀、我々ふひんふひん（不憫）に存ぞん候条、三人共にひとへひとへに、此御このお心持こころもちにて、一代之間者、三人同前どうぜん之御存分ごぞんぶんならては、於元就無曲もととなりにおいてはきまぐな（無念）恨うらみ可申候べくも申候く
（三子教訓状）